

# 初期テレビ時代における子どもの視聴：1957年本宮小学校のアンケートから

## A consideration of the Research on Children Watching television in 1957

加藤裕治

文化政策学部 文化政策学科

Yuji KATO

Department of Regional Cultural Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

現在、初期テレビの時代をめぐるメディア研究は、その時代を街頭テレビの記憶に代表させてしまうだけでなく、各地域の人々の生活にテレビがどのように入り込み、どのような影響を与え、そしてどのような可能性を与えたのかという点を調査するといった、より詳細にメディアと人々の関係を把握するものに移行している。本報告は、1957年に行われた福島県・本宮小学校のテレビに関するアンケート調査を見直すことにより、当時の子どもによるテレビ受容の実態や状況を読み取る。さらに、こうしたミクロなテレビ受容の調査を積み重ねることが、メディアによる生活世界の変容の再考を促し、さらにメディアと生活が一体化した現代社会への考察につながることを示す。

In recent years, media studies of television in Japan researching early television focus on the acceptance process of media technology from ambient (public space) television to family television. Common questions investigated include, "What kind of changes did television make to everyday life?", "What effect did television have on people?", and "What did people feel about the possibilities of television?". This paper studies the research on the television watching at MOTOMIYA elementary school, in Fukushima prefecture, in 1957. The research has recorded facts regarding the TV acceptance of children in the 1950s. We can glean a deeper understanding of the problems and possibilities of television for children at that time by examining it. This research gives us the opportunity to rethink the acceptance of television in everyday life and consider the problems and possibilities of our current media society.

### 1. はじめに

本研究報告は初期テレビの時代<sup>1)</sup>における子どものテレビ受容を把握するため、福島県安達郡本宮町（現在：本宮市）本宮小学校で実施された児童に対するテレビ視聴アンケート調査（『テレビに集う子どもたち』『視聴覚教育』1957年4月号に掲載）を手掛かりに考察を進める。このアンケート調査は、1957年後半から1958年にかけてNHKや文部省で実施される大規模なテレビ調査以前の1957年4月という時期に行なわれており、さらに東京や大都市部ではない、地方でのテレビ受容の実態が明らかになる貴重な資料である。以下、初期テレビ研究の現在の状況を概括した後、アンケート調査の行なわれた1957年当時の本宮小学校の状況を把握しつつ、そのアンケート結果から読み取れるその時代の子どものテレビ視聴状況を確認する。その上で、そのアンケートデータがテレビ研究に与える示唆を論じる。

### 2. 初期テレビ研究の現在

1953年、日本でテレビの本放送が開始された。その年の2月1日には日本放送協会（NHK）、8月28日には民間放送として日本テレビ（NTV）が本放送を開始する。だが、当時の大学出の初任給が1万円程度の時代に受像機は20～30万円と高価だったこともあり、放送開始時のNHKテレビ放送受信契約は約1500件に過ぎなかった。この後、1950年代のテレビ受信契約の推移を見ると、1953年度末には約1万7千（受信契約数、以下同様）、1954年：5万3千、1955年：16万6千、1956年：41万9千、

1957年：90万9千、1958年：198万2千、1959年：414万9千となり<sup>2)</sup>、1958年を境に、急激に契約者数が増加するのが1950年代のテレビの特徴である。

この1958年以降においてテレビ受信契約数が増加した社会的な背景については、吉見俊哉の研究に詳しい。吉見によれば、大きな転機となったのは皇太子ご成婚が1958年末に発表され、1959年4月10日に行われるご成婚パレードに向かって放送局の開局が相次いだことによる（吉見2002）。1958年末、開局をしていた民間放送のテレビ放送局数は17社であったが、1959年には37社となる。また東京のテレビ放送局は、NHK、NTV、またラジオ東京テレビ（1955年本放送開始、現：TBS）の3局であったが、1959年には日本教育テレビ（現：テレビ朝日）及びフジテレビが相次いで開局した。

一方、1953年から58年までの6年間、テレビはまだ社会における中心的なメディアではなかった。むしろ1950年代の前半は、ラジオがお茶の間の主役であった。NHKの受信契約数ベースで、1952年8月に1000万の契約を超えたラジオは、1958年11月には約1481万契約となり、戦前・戦後を通して契約数のピークに到達していた。そのため、多くの人にとってこの時代のテレビの記憶は、祝祭の意味を持った街頭テレビなのである。駅前や盛り場、寺社境内、電気店の店頭などに置かれたテレビは、多くの人を惹きつけた。このようにまだ家庭のメディアではなかった（街頭の）テレビは、例えばプロレスにおける力道山の活躍と結びつけられることで、戦後の復興と結びついた祝祭的な記憶として語られてきた。

だが、こうした初期テレビ受容の語り方は、テレビ研究の分野において、強烈なイベントを中心とした記憶へと回

収されすぎることが問題視されてきた。例えば飯田崇雄（2005）は「あまりにもイベントの特殊性を強調しすぎること、日常的に電器店でテレビジョンが買い求められ、社会に広がっていくプロセスは無視されてきた」と述べている。またこの飯田崇雄の議論を受け飯田豊（2016）も、従来の放送史・メディア史に対し「テレビは戦後、全国各地の地域社会の日常のなかに、いったいどのように溶け込んでいったのだろうか」と指摘する。

現在、このような問題関心から、日本における初期テレビ受容の状況が再考されつつある。例えば太田美奈子（2017）は青森県下北郡佐井村を事例として、直接、現地の人々への聞き取りを進めながら、地方におけるテレビの受容プロセスやその意味について考察している。つまり、これまであまり目が向けられなかった、テレビという映像メディアが、各地の人々の日常生活にどのように受け入れられ、またどのような意味を担ったか、また人々にどんな希望を与えたのかという諸点を、一種の「民俗学」として探求している。またこうした詳細な研究は、地方の生活にテレビという「動く映像」の視聴が日常化していくプロセスを探る映像メディアの文化社会的な課題に対しても、新たな視点を開くものといえる。

本研究報告はこうした問題意識のもとで、冒頭でも述べたように、この時代のテレビ受容が記録された一つの調査報告を取り上げたい。その調査報告は『視聴覚教育』1957年4月号に掲載された「テレビに集う子どもたち」と題された、福島県安達郡本宮町の町立本宮小学校で行われたアンケート報告である。このアンケートは1957年前半という、テレビ受信機の台数が急激に拡大する1958年以前の時期に実施されており、当時の子ども（小学生）のテレビ受容を知るうえで大変貴重なものである。また実施箇所も、東京や大都市圏ではなく地方の状況を記したもののとして興味深い。本稿は以下、このアンケートが行われた当時の本宮のテレビをめぐる状況の概略と、そのアンケートから読み取れる、本宮の子どもたちのテレビ視聴の状況を把握し、その事例から初期テレビ考察の論点を示す。

### 3. 1957年当時の本宮小学校（アンケート調査実施校）をめぐる状況

最初に、1957年にアンケート調査が行われた当時の本宮小学校の状況について報告したい。

この本宮小学校（写真1）のある福島県安達郡本宮町は、現在本宮市の一部となっているが、福島県中通りと呼ばれる地域にあり、県庁所在位置である福島市からは南に20～30kmほどの位置にあたる（写真2）。現在、東北本線に乗りすると福島・本宮間は鉄道で30分ほどの距離である。町の真ん中には阿武隈川が南北に流れ、1948年のアイオン台風や翌年1949年のキティ台風などで、たびたび大きな水害に見舞われた地域でもある。

本宮小学校はJRの本宮駅から北におよそ1kmほど、徒歩で15分程度の場所にある。この小学校は、この調査が行われた1957年当時、全国でも珍しい映像教育の活動「本宮方式映画教室」が行われたことで知られている。これは、1956年、日本中で性典映画<sup>3)</sup>や太陽族映画が批判される中、青少年に優れた映画を提供しようと、本宮小



写真1：現在の本宮小学校（2017年3月7日筆者撮影）



写真2：JR本宮駅近くの街並み（2017年3月7日筆者撮影）

学校に通う児童の保護者（PTA）らがはじめた活動である。この運動は、本宮小学校のPTA、学校、地域社会と、当時町に2件あった映画館のひとつである「本宮中央館」が協力し、その劇場で青少年にふさわしい映画を上映する代わりに、町の人たちが映画のチケットを販売し、映画館で映画を鑑賞させ、教育に利用するという試みであった（本宮町史専門委員会1993:784-788）。

この本宮方式映画教室では、1960年代に入り自主映画制作を目指す動きが生まれ、1965年には映画「こころの山脈（やまなみ）」を地元の人々の協力のもと撮影している。監督は吉村公三郎、出演は宇野重吉、山岡久乃、奈良岡朋子などであるが、本宮小学校の児童の他に、本宮第一中学、県立本宮高校の学生、また町民の多くが参加した。さらに製作協力には新藤兼人、能登節雄が名を連ねている。

また、今回取り上げるアンケート調査の執筆者名は岡部司となっている。岡部は当時、本宮小学校の教員であり、この本宮方式映画教室の活動において中心的な活動を務めたメンバーの一人であった。この本宮方式映画教室の年度ごとのまとめを残した『育ちゆくものの記録』を確認したところ、1963年度版の編集責任に岡部の名前が記載されている。その際の肩書きは本宮小学校視聴覚研究部とあり、当時の小学校における視聴覚教育に携わっていたよ



うである。今回取り上げたテレビに関するアンケートが行われた理由については、現地での聞き取り調査からは明らかにならなかったが、こうした本宮の映像教育の流れや中心メンバーの教員の存在があったことは間違いなさそうである。この地域独特の映像に関わる教育運動が、テレビ受容のはじまった早期の段階でアンケート調査を実施した理由のひとつだといえる。

なお現在、この本宮方式映画教室を実施した「本宮中央館」はすでに閉館されているが、当時、町で営業していたもうひとつの映画館、「本宮映画劇場」は1914年に建設された建物が現在も現存し、レトロ映画館として著名な場所となっている（写真3）。



写真3：本宮映画劇場（2017年3月7日筆者撮影）

#### 4. 1957年の本宮におけるテレビ環境

次に、1957年時点の本宮におけるテレビをめぐる諸環境について論じる。まずテレビ受像機の台数は、町全体で8台と記載されている。内訳は「ラジオ屋」に4台、「ソバ屋」に4台であり、店1件あたり1台ずつとなっている。この台数については町史の記録にも残っている。このような台数の記録が正式に残っていることが、当時の地域の人々におけるテレビへの注目度や期待度を物語る。なお、本宮での聞き取り調査において、当時、テレビを設置していた「ラジオ屋」のうち、少なくとも1件が、現在も電器店として営業を続けていることがわかった<sup>4)</sup>。

またアンケート調査のテレビ環境の説明には、視聴可能な放送局として、夏季は東京のNHK、NTV、JOKR（現在のTBS）、そして仙台のNHKが記録されている。また冬季は、仙台のNHKのみが視聴できるとされている。これらの点からこの時期の本宮では、夏と冬で電波の状況が異なっており、季節により見ることのできる放送局（番組）が異なることが推察される。

この本宮の視聴可能な放送局については、若干の補足が必要であろう。福島県においてテレビ放送局がはじめて開局したのは1959年4月のNHK福島放送局であった。しかし当時は、県単位の放送局が存在しなくても、この本宮のように様々な形で放送局の電波を受信し、テレビ放送を受信していたのである。例えば先に言及した太田によれば、青森県下北郡佐井村では、1959年のNHK青森放送

局の開局以前から、NHK函館放送局（1957年開局）からの電波を受信しテレビ視聴が行われていたという（太田2017）。

本宮においても、現地での電器店での聞き取りによれば、当時、空き地に自作の巨大なアンテナを立て電波を受信し、テレビを視聴していたとのことであった<sup>5)</sup>。

上記で確認した本宮のテレビ受容の状況は、日本全国の地域のテレビ受容のプロセスが、単に放送局の開局という放送産業・制度とは異なる水準で存在したことを明らかにする。そこにはテレビ受信に対する地方の人々の思いや行動、またその背後にあるテレビへの憧れや期待といったものが介在していると想定される。この事例は、こうした諸点をより詳細に考察する必要性を投げかけるものといえる。

#### 5. 本宮小学校のテレビアンケート調査内容とその結果

次に「テレビに集う子どもたち」のアンケート調査の内容と結果について見ていきたい。

このアンケート調査が掲載された雑誌は『視聴覚教育』である。戦前、映画の教育利用を推進した全日本活映教育研究会が戦後、財団法人日本映画教育協会（現在：一般財団法人日本視聴覚教育協会）となり、その機関誌であった月刊「映画教室」が1951年に改題して発行された雑誌である。

調査の対象者は、4年生から6年生までの各学年100名ずつとの記載がある（当時の本宮小学校の全校生徒数は1520名）。また調査実施日だが、残念ながらその年月日が記載されていない。しかし、この調査の掲載されている『視聴覚教育』1957年4月号の出版以前に行われたことは確実である。さらに、調査方法の記述の中に、NHK仙台放送局の電波が入るとされているため、仙台放送局が開局した1956年3月21日以降に調査されていると考えられる。

アンケートの問いは13項目が設定されている。以下、順に内容と結果を見ていく。

問1は「テレビを視聴したことがあるもの」で「ある99%」、また問2は「みたことがあるとすればどこでみたか」では「ラジオ屋で見るもの68%、ソバ屋30%、よその街2%」となっている。当時の子どもたちが、「ラジオ屋」を中心にテレビを見ていたことがわかる。また「ソバ屋」は当初は食事をせずともテレビが見られたが、後には食券を購入しなければならなくなっており、子どもたちが飲食代を払ってまでも「ソバ屋」でテレビを見ることへの教員側の不安が述べられている。

問3は「みる時間はいつ頃であるか」の質問。小学生のため平日昼間は学校に通っており、日曜日を除いて午後と回答されている。では、彼らはテレビを何時頃見ていたのか。問4「みる時間はなん時からなん時までの間か」の回答には選択肢が幾つかあり、次のような結果となっている。「A・午後6時から7時まで（1時間）23%」「B・午後6時から8時まで（2時間）5%」「C・午後7時から8時まで（1時間）35%」「D・午後7時から9時まで（2時間）18%」「E・30分未満のもの7%」「F・時間不定のもの12%」。現在の目から見れば回答項目のカテゴリーがい

ささか奇妙であるが、この点の意図は現時点で不明である。ただし、このテレビの時間調査の結果は、当時の地方におけるテレビ受容の一端について、幾つかの論点を提供する。

第一に、視聴時間の長さは、AとCの項目が1時間であり、BとDの項目が2時間である。ただし30分未満(E)は少なく、テレビ視聴をはじめると、街頭であっても、子どもたちが1時間以上はテレビに向かい合っていたことが確認できる。

次に注目すべきは、視聴の時間帯である。AとBが午後6時からとなっている。しかしこの調査をみると、CとDをあわせた午後7時からが過半数を超えている。夏、冬の時期の違いによる変化は不明だが、比較的遅い時間に街頭テレビが視聴されていたことがわかる。こうした家庭の外部(共同体あるいは公共空間における)での子どもの視聴習慣の形成は、子どもの生活時間の意識変容を考える上で興味深いデータであるといえる。以後1960年代の家庭で受容されていくテレビ編成に与えた影響や、ゴールデンタイムを子どもの視聴との関係で捉えていくテレビ産業・消費社会(アニメ番組とCMなど)の観点とも関わらるだろう。このアンケートのまとめには、学校の「帰宅後の校外生活、特に夜間これらによって、翌日の活動に障害となるような事柄」は避けられなければならないと述べられおり、子どもの生活時間の変容への問題点が、当時から意識されていたことがわかる。

続く問5は「テレビをみるのは次のうちどれか」という問い。「毎日みる10%、ときどきみる90%」。この違いは「ラジオ屋」との路離の近さからくるものだと分析されている。

問6では「あなたのテレビプログラムで何が一番すきか」が質問され、「相撲48%、プロレス32%、野球12%、「私の秘密」3%」などと回答されている。回答の上位にはプロレスが入っているが、小林正幸はプロレスへの注目を作り出したのがテレビであるという以上に、テレビ草創期において、逆に人々に熱狂的に受け入れられたプロレス中継によって、テレビというメディアが群衆に理解されていったのではないかと論じている(小林2011:70-88)。このような小林の「テレビとプロレス」の関係への指摘は、他のスポーツとテレビの関係を考察する上でも重要だと考えられる。スポーツの魅力がテレビを通して伝わる「見るスポーツ」の問題だけでなく、スポーツ(というコンテンツ)を通して、テレビという「見るメディア」への理解や読解の「知」が形成されたのではないかという論点は、テレビメディア研究にとって、今後、考慮しなければならない問題であろう。ちなみに相撲とテレビに関しては、1959年に上映された小津安二郎監督の映画『おはよう』において、子どもたちが頻繁にテレビのある家に相撲を見に行くシーンが存在する。さらに子どもたちがテレビの購入をせがむ際、相撲を見たいということが動機として描かれており、当時の相撲とテレビの関係を考える上で興味深い。

問7は「テレビにでてくる人ですきな人は」の質問。回答は「力道山23%、若の花21%」などで、プロレス、相撲それぞれの当時のスター(若の花は初代)が支持されている。また問8「テレビをみて目が疲れたということはないか」の質問では、「ある30%、ない70%」となっている。

ただしこの結果に対しては、テレビが「チラツク」ので目が疲れるのは当たり前とのコメントが述べられている。当時のテレビ受像機、および電波状況を考えると、映像文化的な視点からすれば、当時の人々が「(チラツク)テレビ画面をどう見ていたのか」という点は、検討されなければならない課題であることがわかる。

問9は「テレビをみて自分のくらしに役立つことはあるか」、続く問10は「あるとすれば、それはどんなことか」という質問である。前者は「ある22%、ない78%」。「ある」の者たちは「お料理のこと31%、ニュース28%」が上位となっている。この点についてのコメントとして、子どもたちに「ダイアルの選択の自由がない」ため、「プログラムの選択」ができず、偶然出会った番組でしかその判断ができないからだと分析されている。しかし一方で、こうした初期テレビの子どもたちの受容については、斉藤次郎が「何を見るかが問題なのではなく、見ること自体が遊びだった」と分析していることが参考になる(斉藤1975:49)。斉藤は、こうしたテレビとの接し方は、それまでラジオが「遊びのヒント集」だったことに対して、「見ること自体が遊び」というような「映像文化総体」として受け入れられたのだというのだ。こうした斉藤の指摘は、日常生活の中に「動く映像」が入り込んでいく際の、子どもの意識や振る舞いを考えるうえで、再考されるべき点であるといえる。

そして問11「テレビ放送に何を望むか」に続き、問12は「テレビをみてまねたこと、まねたいと思うことはないか」の質問がなされ、「ある60%、ない40%」と回答されている。主な「まねをしていること」の例として「レスリングの空手チョップ」「野球のバッティングフォーム」その他にも「のど自慢のアナウンサー」、また「私は松島トモ子になりたい」といった意見が掲載されている。こうした子どもの願望については、「子どもたちの夢がこんなところにもあるということを改めて見直す必要がある」とコメントされる一方、「「労少なくして、功大なり」にはならぬようにと述べられている。この質問は、項目自体が興味深い。というのもテレビが「模倣」をもたらすメディアであることが、前提になっているからである。また教員である岡部が、「模倣」を非難するのではなく肯定的に捉え、そこに子どもの夢を読み込んでいる点は、子どもに対するテレビの重要な機能を彼が意識していたことを示しており、注目すべきものである。

最後の設問である問13は「テレビと映画ではどちらが好きか」という質問である。結果は「テレビ19%、映画28%、どちらも53%」となっている。

こうしたアンケート結果に対して、岡部は最後に「映画教室同様、テレビについて指導の手が差し伸べられなければならない」と論じている。映画と同様に、テレビ教育の必要性が述べられており、この調査に本宮方式映画教室の影響がみられる結論となっている。

## 6. 本宮のアンケート調査が意味するもの

このアンケート調査は、簡潔ではあるが、当時の地方におけるテレビ受容状況が垣間見られるものである。一方、この調査が実施された半年後の1957年後半以降、大規模



なテレビ調査が立て続けに行われる。例えばNHKは、静岡市の小・中学生を対象とし、1957年10月と1959年10月の2回に分け、子どもとテレビをめぐる調査（「放送と子どもの生活調査」）を実施する。通称「静岡調査」と呼ばれるこの調査は、57年の第1回目では静岡県内の小中学生3960名を対象にして行われた（布留1958）。

また文部省も1958年6月、お茶の水女子大学教授の波多野完治を委員長とする「テレビ影響力調査委員会」を発足して全国的なテレビ調査を実施する。調査は8都道府県にまたがり、教員・公民館指導員を合わせて144名、父兄1600名、児童は小、中、高校の生徒合わせて2880名の調査対象から意見を抽出するという大規模なものだった（文部省1959）。

こうした調査が行われた背景には、当時、メディア（マスコミ）批判が増加していたことがあげられる。1957年には、大宅壮一による「一億総白痴化」の言葉が現れ<sup>6)</sup>、PTAや婦人団体からはテレビの悪影響が論じられるようになる。さらに、総理府の諮問機関であった中央青少年問題協議会が1958年5月に開いた全国大会で、青少年の犯罪をマスコミの悪影響であるとして、テレビ、映画、出版などに「自粛勸奨」することを決議し、文章で要望するといった出来事が起こったのである（NHK2001:403-404）。

1957年後半から増加する子どもとテレビ視聴をめぐる調査は、上記のような社会背景のもとで実施された。そのため各調査は、テレビ視聴の課題を明らかにしようとする意図が拭い去れない。それに対して、今回取り上げた本宮のアンケート調査は、本宮方式映画教室の影響と考えられるが、子どものテレビ受容を課題としてみるのではなく、テレビの力をどう活かしていくのかという観点を含んでいる。そのため「模倣」について調査され、その振る舞いが肯定的に評価される面を持つなど、子どもとテレビの当時の関係について、大規模な調査では捉えきれない視点が現れている。

またこの調査では、街頭テレビという屋外において、夜の午後7時以降に視聴する子どもが多く存在することが明らかにされている。この点は、テレビ視聴による生活時間の変容や文化受容の観点からも興味深い。これまでのテレビ文化研究において、テレビの時間は「ナショナルな時間」を形成すると論じられてきた（吉見2016）。つまり、地域ごとの生活時間が、テレビの時間編成により均質化されていくという議論である。確かに今回取り上げたアンケート調査を見る限り、テレビ受容はその初期から均質化のプロセスを内包していたといえる。しかし一方では逆に、均質化というより、子ども達に新たな夜の時間＝テレビ視聴の時間を創造したプロセスを示しているようにも見える。

NHKが1941年に行った「生活時間調査」によれば、国民学校5年生の11月の生活は、起床が午前6時、夕食は午後6時、その後、勉強と遊び、入浴など身の回りのことをする時間が続き、午後8時前後の「ラジオ・読書」率は同世代で約10%、そして多くが午後8時半には就寝してしまうというものだった（日本放送協会放送世論調査所編1983:225-226）。戦前における午後8時台とは、子どもにとって就寝へと向かう時間帯なのであった<sup>7)</sup>。

この戦前の生活時間のあり方と比較すれば、「夜」という子どものテレビ視聴時間は、テレビによって「開かれた」

時間帯であるといえる。つまり就寝の時間がテレビに置き換わったというだけではなく、テレビというメディアがなければそもそも生まれなかった時間なのである。例えば次のような回想は、こうしたテレビが生み出す時間という論点を補完する。

それまではラジオだった。夕方の6時前だったと思う。「コロの物語」（乾信一郎・作）というラジオ番組があった。…聴きおわると、眠ってしまう。シンプルな生活だった。当時は、みんな早い時間に眠った。まだ夜でもないのに、寝てしまう。…そこにテレビがやって来た。…テレビが入ってきたとき、ぼくはどんな気持ちだったか。はっきりとはおぼえていない。でもお隣の人がぼくの家に入って来たことはおぼえている。お隣はまだテレビがないので、おおみそかなどは、一家で来た。紅白歌合戦を見るために。

この回想は、詩人の荒川洋治（1999）のものである。ここには、テレビが生活に入り込んで生まれた時間が、子どもたちにそれまでの生活を変容させてしまうような時間感覚をもたらした様子が描かれている。ラジオしか電子メディアがなかった時代の「夜の無さ」。それに対して、テレビが子どもの「夜の時間を開いた」感覚が述べられているのだ。こうした論点は、今回の本報告から説明できる射程を超えているだろう。しかし、本宮の初期テレビの調査は、テレビというメディアが子どもの生活世界に、また時間感覚に何をもたらしたのかの考察のきっかけを与えてくれる。またこの点は、メディアの浸透が、生活世界の側に与える影響について考察すべきという、より普遍的な問いを開くものだろう。さらに、こうしたテレビの1950年代の調査は、メディアが生活と一体化して切り分けることが困難になった現代の状況を再考する際の出発点となる可能性を持つ。こうした諸点を論じることは、本報告において検証された点を遥かに超えるものであり、今後の課題としたい。

## 注

- 1) 初期テレビの時代について厳密な定義があるわけではないが、ここでは1953年の本放送以降で、受信機の台数が100万台に達した1958年ごろまでを指すものとする。後にも述べるように、この時代は、1959年の皇太子ご成婚中継以後、テレビが社会の中心的なメディアとして認知されていく以前であり、家庭でテレビを見ることが珍しかった時代である。また本論文ではテレビジョンという言葉ではなく、すべてテレビで統一する。また映像を見る装置を特に指すときはテレビ受像機の言葉を使う。
- 2) この受信契約数は統計局における「ラジオ・テレビジョン放送局数及びテレビジョン放送受信契約数」による（<http://www.stat.go.jp/data/zensho/2009/index.htm> 最終閲覧2017年10月6日）
- 3) 「性典もの」とは、主に1953年にヒットした『十代の性典』（大映）や、『乙女の診察室』（松竹）、『思春期』（東宝）など、思春期の学生を描いた映画を指す。
- 4) 2017年3月7日、本宮市立歴史民俗資料館での聞き取り調査にもとづく
- 5) 2017年3月7日、本宮市で当時、「ラジオ屋」店主の子どもであった方への聞き取り調査にもとづく。
- 6) 「一億総白痴化」という流行語は、1956年11月3日に放送された日本テレビの『何でもやりますショー』という娯楽番組において、早稲田側の応援席で慶応の応援旗を振るという早慶戦の際の「やらせ」

事件に端を発している。その時期、以前からテレビの「白痴化傾向」などと発言していた大宅壮一の言葉が、この事件を機に種々の経緯を経て、「総」の字を含む「一億総白痴化」として定着したとされる。詳しくは北村（2007）を参照。

- 7) NHKの「国民生活時間調査」は戦前の1941年に初めて実施され、戦後になってからは、1960年に実施される。そのため、この間の日本人の生活時間に関する客観的データが把握できる資料は限られている。一方メディア論からすれば、こうした生活調査を実施した主体がNHKであることは、重要な意味を持つ。というのも、ラジオやテレビの編成（放送時間）のために、人々の生活時間を調査する必要が生じていたからである。テレビ（放送）は生活時間と不可分のメディアなのである。また、その結果でラジオやテレビの編成が決まることは、逆に、ラジオやテレビのメディアが生活時間へ入り込み、そして生活時間を変化させる再帰性が生まれることを意味する。こうしたメディアの編成と時間の関係性については、佐田（1988）を参照のこと。

## 参考文献

- 荒川洋治,1999,『風の中のテレビ』三木卓編『ここにひかる物語』かまくら春秋社:1999:8-11.
- 飯田崇雄,2005,『「モノ=商品」としてのテレビジョン』『放送メディア研究』(3):119-150.
- 飯田豊,2016,『テレビが見世物だったころ 初期テレビジョンの考古学』青弓社.
- 内川芳美,大森幸男,竹内郁郎,仲佐秀雄,藤竹暁,水谷修,1996『座談会 放送とともに歩んだ調査研究～放送文化研究所50年 回顧と展望～』『放送研究と調査』46(6):2-21.
- 太田美奈子,2017,『地方における初期テレビ受容—青森県下北郡佐井村(1957-1959)を事例に—』日本マス・コミュニケーション学会・2017年度春季研究発表会・研究発表論文予稿.
- 岡部司,1957,『テレビに集う子どもたち』『視聴覚教育』11(4):14-21.
- 北村充史,2007,『テレビは日本人を「バカ」にしたか? 大宅壮一と「一億総白痴化」の時代』平凡社新書.
- 小林正幸,2011,『力道山をめぐる経験 プロレスから見るメディアと社会』風塵社.
- 斎藤次郎,1975,『子どもたちの現在—子ども文化の構造と論理—』風媒社.
- 日本放送協会編,2001,『20世紀放送史 上』NHK出版.
- 日本放送協会放送世論調査所編,1983,『テレビ視聴の30年』NHK出版.
- 布留武郎,1958,『放送とこどもの生活—静岡調査中間報告1』『NHK文研月報』8(8):2-18.
- 本宮町史専門委員会編,1993,『本宮町史 第11巻各論編 3(文化)』本宮町史編集委員会.
- 文部省,1959,『昭和33年度 テレビジョン影響調査』.
- 佐田一彦,1988,『放送と時間 放送の原点をさぐる』文一総合出版.
- 吉見俊哉,2002,『メディア・イベントとしての「御成婚」』津金澤聰廣編著『戦後日本のメディア・イベント[1945-1960年]』世界思想社:267-287.
- ,2016,『視覚都市の地政学—まなざしとしての近代—』岩波書店.

※本研究報告は、科研費研究 研究課題/領域番号16K04083「戦後日本社会におけるテレビによる時間意識の編成と多層性に関する研究」の成果の一部である。